

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## Epistemic moods of non-conjunctive type in old Japanese

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福田, 嘉一郎, Fukuda, Yoshiichiro メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1392">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1392</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 中古日本語の蓋然性判断の非接続叙法

福田 嘉一郎

キーワード：命題，接尾語，異形態，テンス

## 1. はじめに

筆者は、述語が表す命題事態の事実性を話者がどのようにとらえるかによって、述語が体系的に異なる形態をとるとき、文法範疇<sup>カテゴリー</sup>をなすそれらの形態の対立を指して、叙法と呼ぶ立場をとる。叙法をこのように規定すると、中古日本語の叙法は、従来、「(用言の)活用」「(テンス，モダリティ)助動詞」「終助詞」「接続助詞」など、さまざまな品詞あるいは文法現象に分割されて説明されてきたことになる。

筆者は中古語の叙法を体系的に記述することを目指しているが、本稿は、命題事態が事実 {である／となる} 蓋然性を話者が判断する非接続叙法について、記述を試みるものである。

## 2. 叙法形式と命題形式

### 2.1 中古語の叙法形式

日本語の叙法を表す形式は、常に節の末尾に現れるもの、すなわち、話者の聞き手に対する態度を表す形式<sup>1</sup>、節に修飾される名詞<sup>2</sup>、または、節を後続の節につなぐ形式<sup>3</sup>のみを、後接させうるものでなければならない。その他の形式を後接させうるものは命題形式といえる。

---

<sup>1</sup> 間投助詞、終助詞「な」「かし」、係助詞「や」の文末用法、等。学校文法では、終助詞の「な」は「詠嘆」を表し、「かし」は「念を押す」などと説明されている。それらは間投助詞とされることもある。

<sup>2</sup> 名詞節（準体句）をつくる場合、叙法形式自体が名詞の機能を併せもっている。なお、格助詞に由来する接続助詞「に」「を」を後接させる場合も、名詞節をつくる用法と見なす。

<sup>3</sup> 接続助詞「ば」「ど(も)」。いずれも学校文法では「已然形」に後接するとされる。

また、日本語の叙法形式のなかには、文末（対聞き手形式を伴う場合を含む）に立ちうるものと、文末に立ちえないものがあり、後者の形式は節を後続の節につなぐ接続の機能を併せもっている。そこで、前者を非接続叙法形式、後者を接続叙法形式と呼ぶことにする。

中古語の叙法形式（接尾語）の体系は、（表 1）のようにまとめることができる。

（表 1） 中古日本語の叙法接尾語（下線を施した形式が本稿で取り上げるもの）

命題事態の事実性のとらえ方			非接続／接続	非接続叙法形式	接続叙法形式		
命題事態が事実 {である／となる} 蓋然性を判断する	蓋然性 = 1	述語の時を時間軸上に定位しない [確言]		「 <u>い</u> 」			
		述語の時を過去に定位する [回顧]	命題事態を実際に観察した時 = 述語の時		「 <u>き</u> 」		
			述語の時より後で命題事態についての情報を取得した		「 <u>けり</u> 」		
	0 < 蓋然性 < 1 [概言]		否定を兼ねない	述語の時が発話時以後	「 <u>む</u> 」	「未然ば」	「と(も)」
				述語の時が発話時と同時	「 <u>らむ</u> 」		
				述語の時が発話時以前	「 <u>けむ</u> 」		
			否定を兼ねる	「 <u>じ</u> 」			
蓋然性 = 0 [仮想]			「 <u>まし</u> 」	「せば」			
命題事態が事実 {である／となる} ように求める [希求]	聞き手の動き・状態を希求する	否定を兼ねない		「 <u>e</u> 」			
				「 <u>そ</u> 」			
		否定を兼ねる	「禁止な」				
	話者自身の動き・状態を希求する			「てしか・にしか」			
		「ばや」					
第三者の動き・状態を希求する				「なむ」			
命題事態の事実性のとらえ方を後続節の述語に委ねる [中止]			否定を兼ねない		「 <u>i</u> 」		
					「て」		
					「つつ」		
				「ながら」			
		否定を兼ねる		「 <u>で</u> 」			

## 2.2 中古語の命題形式

中古語の主な命題形式を、その形態と、述語の核になりうるか否かに基づいて分類すると、(表2)のようになる。

(表2) 中古日本語の命題形式

形態 \ 述語の核	核になりうる	核になりえない (接尾語)
「四段」型	(例)「咲く」:/sak-/	「たまふ」:/-itamaF-/~/-tamaF-/
「ラ変」型	(例)「あり」:/ar-/	「結果たり」:/-itar-/~/-tar-/ 「り」:/-er-/~/-r-/ 「はべり」:/-iFaber-/~/-Faber-/ 「めり」:/-umer-/~/-rumer-/~/-mer-/~/-kaNmer-/ 「終止なり」:/-unar-/~/-runar-/~ /-nar-/~/-kaNnar-/
「上・下一段」型	(例)「着る」:/ki-/ (例)「蹴る」:/ke-/	
「上・下二段」型	(例)「過ぐ」:/sugi-/~ /sugu-/ (例)「受く」:/uke-/~ /uku-/	「さす」:/-ase-/~/-asu-/~/-sase-/~/-sasu-/ 「しむ」:/-asime-/~/-asimu-/~/-sasime-/~ /-sasimu-/~/-karasime-/~/-karasimu-/ 「らる」:/-are-/~/-aru-/~/-rare-/~/-raru-/ 「つ」:/-ite-/~/-itu-/~/-te-/~/-tu-/~/-karitu-/
「ナ変」型	(例)「死ぬ」:/sin-/~ /sinu-/	「ぬ」:/-in-/~/-inu-/~/-n-/~/-nu-/~ /-karin-/~/-karinu-/
「カ変」型	(例)「来」:/ko-/~ /ki-/~/ku-/	
「サ変」型	(例)「為」:/se-/~ /si-/~/so-/~	「むず」:/-amuzu-/~/-muzu-/~/-karamuzu-/
「ク活」型	(例)「高し」:/taka-/	「べし」:/-ube-/~/-rube-/~/-be-/~/-karube-/
「シク活」型	(例)「悲し」:/kanasi-/	「まほし」:/-amaFosi-/~/-maFosi-/~/-kamaFosi-/ 「まじ」:/-umazi-/~/-rumazi-/~/-mazi-/~/-karumazi-/
「ナリ・タリ」型		「連体なり」:/-nar-/~/-ni-/ 「指定たり」:/-tar-/~/-to-/
特殊型		「ず」:/-az-/~/-an-/~/-azar-/~/-z-/~/-n-/~ /-zar-/~/-karaz-/~/-karan-/~/-karazar-/

「上・下二段」型、「ナ変」型、「カ変」型、「サ変」型、「ナリ・タリ」型、特殊型の命題形式は、後接する語によって選ばれる異形態を持っている<sup>4</sup>。また、「連体なり」「指定たり」を除く、述語の核になりえない命題形式は、前接する語によって選ばれる異形態を持っている。「さす」「しむ」「らる」「つ」「ぬ」「ず」は、前接語と後接語の条件をともに満たすように選ばれる異形態を持っていることになる。変化相を表すアスペクトの接尾語「ぬ」を例にとると、その異形態は(表 3)のように分布する。

(表 3) 変化相接尾語「ぬ」の異形態

前接語条件 \ 後接語条件	右欄以外の語の母音で始まる異形態	「めり」「終止なり」「べし」「u」「らむ」「と(も)」の、「ナ変」型前接語に応じた異形態
「四段」型、「ラ変」型、「ナリ・タリ」型(-r-), 特殊型(-r-)	/-in-/ (例)「咲きにき」 sak- <i>in</i> -iki	/-inu-/ (例)「咲きぬ」 sak- <i>inu</i> -φ
「上・下二段」型(-i-, -e-), 「カ変」型(-i-), 「サ変」型(-i-)	/-n-/ (例)「過ぎね」 sugi- <i>n</i> -e	/-nu-/ (例)「過ぎぬらむ」 sugi- <i>nu</i> -ramu
「ク活」型, 「シク活」型	/-karin-/ (例)「高かりなむ」 taka- <i>karin</i> -amu	/-karinu-/ (例)「高かりぬべし」 taka- <i>karinu</i> -be-si

### 3. 蓋然性判断の叙法形式

#### 3.1 確言

話者が、命題事態が事実 {である/となる} 蓋然性を 1 と判断する<sup>5</sup>中古語の叙法(すべて非接続叙法形式によって表される)のうち、述語の時を時間軸上に定位しないものを「確言」とする。確言は接尾語「u」によって表される。

確言接尾語 {「u」: /-u/~/ -i/~/ -ru/~/ -φ/~/ -si/~/ -ki/~/ -e/~/ -re/~/

<sup>4</sup> いわゆる「二段活用的一段化」は、「上・下二段」型命題形式の u で終わる異形態が失われる現象である。なお、「むず」は「サ変」型に分類したが、後接語によって選ばれる異形態は持っていない。

<sup>5</sup> 疑問文においては、命題事態が事実 {である/となる} 蓋然性を 1 と判断してよいか否か、または、事実 {である/となる} 蓋然性を 1 と判断すべき命題事態がどのような事態であるかを疑う。

/-kere/} の異形態は、(表 4)のように分布する。

(表 4) 確言接尾語「u」の異形態

統語条件 前接語条件	(i)節内に「ぞ」 「なむ」「や」「か」 「こそ」・疑問語が ない文末	(ii)節内に「ぞ」「な む」「や」「か」・疑問語 がある文末、名詞修 飾、名詞節末	(iii)節内に「こ そ」がある文末、 「已然ば」「ど (も)」の前
「四段」型	/-u/	/-u/	/-e/
「ラ変」型、「ナリ・タリ」型 (-r-)	/-i/	/-u/	/-e/
特殊型(-z-) /-az-/～ /-z-/～/-karaz-/	/-u/	—	—
特殊型(-n-) /-an-/～ /-n-/～/-karan-/	—	/-u/	/-e/
特殊型(-r-) /-azar-/～ /-zar-/～/-karazar-/	—	/-u/	/-e/
「上・下一段」型	/-ru/	/-ru/	/-re/
「上・下二段」型(-u-), 「ナ変」 型(-u-), 「カ変」型 (-u-), 「サ変」型(-u-)	/-φ/	/-ru/	/-re/
「ク活」型 <sup>6</sup>	/-si/	/-ki/	/-kere/
「シク活」型 <sup>7</sup>	/-φ/	/-ki/	/-kere/

- (1) いかなる行き触れにかからせたまふ (kakar-ase-tamaF-u) ぞや [ど  
のような穢れにご遭遇なされたのか] (源氏・夕顔)
- (2) この上<sup>かみ</sup>の聖<sup>ひじり</sup>の方<sup>かた</sup>に、源氏の中将の、癩<sup>わらはやみ</sup>病まじなひにものしたまひけ  
るを、ただ今なむ聞きつけはべる (kikituke-Faber-u) [ここの上の方  
の坊に、源氏の中将が癩病のまじないにいらっしゃったというのを、たっ  
た今聞きつけました] (源氏・若紫)

<sup>6</sup> 「多し (/oFo-/)」に対しては、(i)のとき /-kari/, (ii)のとき /-karu/, (iii)のとき /-kare/ という形も用いられた。

<sup>7</sup> 「同じ (/onazi-/)」に対しては、(ii)の名詞修飾のとき /-φ/ も用いられた。

- (3) まうとは、何しにここにはたびたびは参る (mawir-*u*) ぞ [あなたは何のために度々ここに来るのか] (源氏・浮舟)
- (4) おほやけの御近き衛りを、私の随身に領ぜむと争ひたまふ (arasoF-itamaF-*u*) よ [帝にお近い警護の人を、自分の随身にしようと争いなさっていることよ] (源氏・横笛)
- (5) 今日なむ参りはべる (mawir-iFaber-*u*) [本日、参上いたします] (源氏・葵)
- (6) 色にはいでじ人もこそ知れ (sir-*e*) [色には出すまい、人が知ったら大変だから] (古今・104)
- (7) 殿は粟田山越えたまひぬ (koje-tamaF-inu- $\emptyset$ ) [殿は粟田山をお越えになった] (源氏・関屋)
- (8) 事のありさまはくはしくとり申しつ (torimaus-itu- $\emptyset$ ) [事情は詳しく申し上げた] (源氏・夢浮橋)
- (9) この君をいかにしきこえぬる (sikikoje-nu-*ru*) にか [この君をどんな目にお会わせするのか] (源氏・紅葉賀)
- (10) はてはいかにしつる (si-tu-*ru*) ぞ [しまいにはどうするのか] (源氏・若菜下)

(1)-(6)は、アスペクトの接尾語「ぬ」「つ」「たり」「り」を伴わない中立相（非変化非結果相）の例であるが、述語の時が発話時に対して以前（(1)(2)）、同時（(3)(4)）、以後（(5)(6)）のいずれの場合も、確言接尾語「u」が用いられている。また、(7)-(10)は、接尾語「ぬ」「つ」を伴う変化相の例であるが、述語の時が発話時に対して以前（(7)(8)）の場合も、以後（(9)(10)）の場合も、やはり確言接尾語「u」が用いられている。中古語の確言の叙法形式には、述語の時と発話時との前後関係による形態の対立、すなわち（発話時を基準とする）テンス（時制）が認められず、叙法が確言である場合、話者は述語の時を時間軸上に定位しないといえる。

「u」の諸形態は同一の機能をもつ語の条件異形態と見ることができ、それらの選択は言語慣習によるものであったと考えられる。「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」・疑問語の「係り」に対する「結び」も、仮定的な中古語の共時態においては、一種のとりたて（ある要素を他の暗示される要素と対立させる表現）の形式と慣習的に

呼応する，叙法接尾語の異形態である<sup>8</sup>。それぞれのとりたて方は，「ぞ」「なむ」などの形式自体が表している。

異形態の選択を誤れば，当時の言語慣習からして誤用となるはずであるが，適正とされる選択は慣習によって規定されているにすぎないため，誤ったとしても話者の意図が伝わらないということは起こらない。

- (11) <sup>すずめ</sup>雀の子を<sup>いぬ き</sup>犬君が逃がしつる (nigas-itu-*ru*) [雀の子を犬君が逃がしてしまったの] (源氏・若紫)

(11)のような，(表 4)の(i)の場合に(ii)の場合の形を用いた例は，中古語において既に珍しくなく，後に(i)の場合の形は口語から消滅する（いわゆる「連体形」「終止形」の同一化）。また，(表 4)(iii)の場合の形については，「こそ」と呼応する用法が近世に入って消え，後接していた「ど(も)」の使用も近代以前に廃れた結果，「已然ば」を後接させる用法のみが残った。叙法接尾語 /-e/~/re/~/-kere/ が常に /-ba/ を後接させるなら，それは /-eba/~/-reba/~/-kereba/ という接尾語（接続叙法形式）と分析されるべきものであり，意味も 2.3 で述べる概言を表すように変化したことが認められる。このようにして，現代日本語の（丁寧でない文体の）確言を表す接尾語は，(表 4)(ii)の場合の形に由来するもののみとなっている<sup>9</sup>。

### 3.2 回顧

話者が，命題事態が事実 {である／となる} 蓋然性を 1 と判断する中古語の叙法のうち，述語の時を過去に定位するものを〔回顧〕とする。回顧は接尾語「き」「けり」によって表される。「き」による回顧では，話者が命題事態を実際に観察した時が，述語の時として過去に定位される。他方，「けり」による回顧では，話者が述語の時より後で取得した命題事態についての情報（伝聞情報を含む）に基づいて，述語の時が過去に定位される。

<sup>8</sup> (9)(10)における確言接尾語は，(1)(3)(4)におけるそれらとともに，名詞に後接しうる形式（「ぞ」「よ」「連体なり </-ni-/>」）を後接させていることから，名詞節をつくる用法と見なし，疑問語と呼応するものとは考えない。

<sup>9</sup> ただし，/-(i)tar-u/>/-ta/~/da/（「た」），/de-/+/ar-u/>/da/（「だ」），/ni-/+/ar-u/>/na/（「だ」の異形態）等の，元は命題形式であったものを含み込んだ形が加わっている。



回顧接尾語 {「き」: /-iki/~/-/ki/~/-/kariki/~/-/isi/~/-/si/~/-/karisi/~/-/isika/~/-/sika/~/-/karisika/} の異形態は、(表 5)のように分布する。

(表 5) 回顧 (追憶) 接尾語「き」の異形態

統語条件 前接語条件	(i) 節内に「ぞ」 「なむ」「や」「か」 「こそ」・疑問語が ない文末	(ii) 節内に「ぞ」「な む」「や」「か」・疑問語 がある文末、名詞修 飾、名詞節末	(iii) 節内に「こ そ」がある文末、 「已然ば」「ど(も)」 の前
「四段」型, 「ラ変」型, 「ナ 変」型(-n-), 「ナリ・タリ」 型(-r-), 特殊型(-r-)	/-iki/	/-isi/	/-isika/
「上・下一段」型, 「上・下二 段」型(-i-, -e-)	/-ki/	/-si/	/-sika/
「カ変」型(-o-, -i-)	—	/-si/	/-sika/
「サ変」型(-e-)	—	/-si/	/-sika/
「サ変」型(-i-)	/-ki/	—	—
「ク活」型, 「シク活」型	/-kariki/	/-karisi/	/-karisika/

- (12) 昨夜、御車率<sup>よべ</sup>て帰り<sup>あ</sup>はべりにき (kaFer-iFaber-in-iki) [昨夜 (匂宮  
を宮中に残して供の者だけが) お車を引いて帰って来ました]

(源氏・宿木)

※話者は車が帰り着くのを実際に観察した。

- (13) 皇子<sup>み</sup>たち<sup>こ</sup>あまたあれど、そこをのみなむか<sup>か</sup>かるほどより明け暮れ見し  
(mi-si) [皇子たちは大勢いるが、そなただけを、これくらい<sup>の</sup>幼い時から  
明け暮れ見てきた]

(源氏・紅葉賀)

次に、回顧接尾語 {「けり」: /-ikeri/~/-/keri/~/-/karikeri/~/-/ikeru/~/  
-/keru/~/-/karikeru/~/-/ikere/~/-/kere/~/-/karikere/} の異形態は、(表 6)  
のように分布する。

叙法が回顧であるとき、述語の時は必然的に発話時以前となり、過去の時を表す副詞類が用いられると、ほとんどの場合、(表 1)の「蓋然性=1」の述語は「き」「けり」をとる ((12) (14))。しかしながら、「蓋然性=1」の述語は述語の時が発話

時以前なら「き」「けり」をとるという原則がない ((1) (2) (7) (8)) ため、「き」「けり」はテンスを表す形式とはいえない。

(表6) 回顧(遡及)接尾語「けり」の異形態

統語条件 前接語条件	(i)節内に「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」・疑問語がない文末	(ii)節内に「ぞ」「なむ」「や」「か」・疑問語がある文末、名詞修飾、名詞節末	(iii)節内に「こそ」がある文末、「已然ば」「ども」の前
「四段」型, 「ラ変」型, 「ナ変」型(-n-), 「ナリ・タリ」型(-r-), 特殊型(-r-)	/-ikeri/	/-ikeru/	/-ikere/
「上・下一段」型, 「上・下二段」型(-i-, -e-), 「カ変」型(-i-), 「サ変」型(-i-)	/-keri/	/-keru/	/-kere/
「ク活」型, 「シク活」型	/-karikeri/	/-karikeru/	/-karikere/

(14) 初瀬<sup>はつせ</sup>になん, 昨日<sup>きのふ</sup>みな詣<sup>まう</sup>でにける (maude-n-*ikeru*) [初瀬詣でに昨日皆出かけてしまったそうだ] (源氏・手習)

※話者は家族が出立した後で, そのことについて留守番の者から聞いた。

(15) 犬なども, かかる心あるものなりけり (mono-nar-*ikeri*) [犬などにもこんな心があったのだなあ] (枕・上に候ふ御猫は)

※話者は, 犬にも人間のような心があることを知っているべきであった時より後で, そのことを知った。

### 3.3 概言

話者が, 命題事態が事実 {である／となる} 蓋然性について「 $0 < \text{蓋然性} < 1$ 」と判断する中古語の叙法を「概言」とする。概言は非接続叙法形式と, 接続叙法形式(接尾語「未然ば」「とくも」)によって表される。

概言を表す非接続叙法形式には, 接尾語「む」「らむ」「けむ」「じ」がある。「む」「らむ」「けむ」は, 述語の時が発話時に対して以後(未来)か, 同時(現在)か,

以前（過去）かによって対立するという，テンスの体系をなす<sup>10</sup>。また，「じ」は概言の意味に加えて，否定の意味を兼ねている。

概言接尾語 {「む」: /-amu/~/-/mu/~/-/karamu/~/-/ame/~/-/me/~/-/karame/} の異形態は，(表7)のように分布する。

(表7) 概言（未来）接尾語「む」の異形態

前接語条件 \ 統語条件	(i) 節内に「こそ」がない文末，名詞修飾，名詞節末	(ii) 節内に「こそ」がある文末，「ど(も)」の前
「四段」型，「ラ変」型，「ナ変」型(-n-)，「ナリ・タリ」型(-r-)，特殊型(-r-)	/-amu/	/-ame/
「上・下一段」型，「上・下二段」型(-i-, -e-)，「カ変」型(-o-)，「サ変」型(-e-)	/-mu/	/-me/
「ク活」型，「シク活」型	/-karamu/	/-karame/

(16) 海賊報いせむ (se-*mu*) [海賊が自分たちに仕返しをするだろう]  
(土左・1月21日)

(17) 我こそ死なめ (sin-*ame*) [私の方こそ死んでしまおう] (竹取・19)

(18) ものはかなき身には過ぎにたるよそのおぼえはあらめ (ar-*ame*) ど  
[たよりない私の身には過分という他人の評判はあるだろうが]

(源氏・若菜下)

(19) いと難きことなりとも，わが言はん (iF-*aN*<sup>11</sup>) ことはたばかりてむ  
(tabakar-ite-*mu*) や [たいそう難しいことであっても，私の言うことなら，工夫してくれるだろうか]  
(源氏・浮舟)

概言接尾語 {「らむ」: /-uramu/~/-/ruramu/~/-/ramu/~/-/karuramu/~/-/urame/~/-/rurame/~/-/rame/~/-/karurame/} の異形態は，(表8)のように分布する。

(20) 故里は雪とのみこそ花は散るらめ (tir-*urame*) [今頃昔の都では雪のように花が散っているだろう]  
(古今・111)

<sup>10</sup> ただし，述語の時が非特定である場合は，それが現在でも「む」が用いられる。

<sup>11</sup> /-amu/>/-aN/。

(表8) 概言(現在)接尾語「らむ」の異形態

前接語条件 \ 統語条件	(i)節内に「こそ」がない文末, 名詞修飾, 名詞節末	(ii)節内に「こそ」がある文末, 「ど(も)」の前
「四段」型, 「ラ変」型, 「ナリ・タリ」型(-r-), 特殊型(-r-)	/-uramu/	/-urame/
「上・下一段」型	/-ruramu/	/-rurame/
「上・下二段」型(-u-), 「ナ変」型(-u-), 「カ変」型(-u-), 「サ変」型(-u-)	/-ramu/	/-rame/
「ク活」型, 「シク活」型	/-karuramu/	/-karurame/

(21) あはれてふ言ことをあまたにやらじとや春におくれてひとり咲くらむ

(sak-uramu) [「素晴らしい」という言葉を他の桜にやるまいと思って, 春に遅れて1本だけ咲いているのだろうか] (古今・136)

概言接尾語 {「けむ」: /-ikemu/~/-kemu/~/-karikemu/~/-ikeme/~/-keme/~/-karikeme/} の異形態は, (表9)のように分布する。

(表9) 概言(過去)接尾語「けむ」の異形態

前接語条件 \ 統語条件	(i)節内に「こそ」がない文末, 名詞修飾, 名詞節末	(ii)節内に「こそ」がある文末, 「ど(も)」の前
「四段」型, 「ラ変」型, 「ナ変」型(-n-), 「ナリ・タリ」型(-r-), 特殊型(-r-)	/-ikemu/	/-ikeme/
「上・下一段」型, 「上・下二段」型(-i-, -e-), 「カ変」型(-i-), 「サ変」型(-i-)	/-kemu/	/-keme/
「ク活」型, 「シク活」型	/-karikemu/	/-karikeme/

(22) 京やすみ憂うかりけむ (sumiu-kar ikemu) [京が住みにくかったのだろうか] (伊勢・8)

(23) 笠取かさとりの山はいかでもみぢ染めけむ (momidisome-kemu) [笠取山はどうして木々が色づき始めたのだろうか] (古今・261)

概言接尾語 {「じ」: /-azi/~/-zi/~/-karazi/} の異形態は, (表10)のように分布する。

(表 10) 概言 (兼否定) 接尾語「じ」の異形態

前接語条件	
「四段」型, 「ラ変」型, 「ナ変」型(-n-), 「ナリ・タリ」型(-r-)	/-azi/
「上・下一段」型, 「上・下二段」型(-i-, -e-), 「カ変」型(-o-), 「サ変」型(-e-)	/-zi/
「ク活」型, 「シク活」型	/-karazi/

(24) 月影のいたらぬ里もあらし (ar-*azi*) [月の光が行き届かない里はある  
まい] (古今・880)

(25) 京にはあらし (ar-*azi*) [京には居るまい] (伊勢・9)

(17) (25)における「む」「じ」が (肯定または否定の) 話者の志向を表すのは, 述語の核 (/sin-/ , /ar-/) が表す動き・状態の主が話者であり, かつ, その動き・状態が話者の意志によって制御できるという語用論的条件による。また, (19)における「言はん」の「ん (む) (/aN/)」は, 学校文法では「婉曲」「仮定」を表すなどと説明されるが, これは, 現代日本語の名詞修飾述語に概言という叙法が欠けている (確言と概言の対立がなく, 解釈は文脈に委ねられる) ためである。

### 3.4 仮想

話者が, 命題事態が事実 {である / となる} 蓋然性を 0 と判断する中古語の叙法を [仮想] とする。仮想は接尾語「まし」(非接続叙法形式) と接尾語「せば」(接続叙法形式) によって表される。

仮想接尾語 {「まし」: /-amasi/ ~ /-masi/ ~ /-karamasi/ ~ /-amasika/ ~ /-masika/ ~ /-kamasika/} の異形態は, (表 11) のように分布する。

(26) あひ見ずは恋しきこともなからまし (na-*karamasi*) [お逢いすることがなかったら, こんなに恋しく思うこともなかったら] (古今・678)

(27) 世の中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし (nodoke-*karamasi*) [世の中に桜が無かったら, 人々の春の心持ちはどんなに穏やかなものだろう] (伊勢・82)

(表 11) 仮想接尾語「まし」の異形態

前接語条件	統語条件	(i)節内に「こそ」がない文末, 名詞修飾, 名詞節末	(ii)節内に「こそ」がある文末, 「已然ば」「ども」の前
	「四段」型, 「ラ変」型, 「ナ変」型(-n-), 「ナリ・タリ」型(-r-), 特殊型(-r-)	/-amasi/	/-amasika/
	「上・下一段」型, 「上・下二段」型(-i-, -e-), 「カ変」型(-o-), 「サ変」型(-e-)	/-masi/	/-masika/
	「ク活」型, 「シク活」型	/-karamasi/	/-karamasika/

- (28) その聞きつらむ所にて, きとこそはよまましか (jom-*amasika*) [その(ほととぎすの声を)聞いたという場所で, さっと(歌を)詠めばよかったのに] (枕・五月の御精進のほど)
- (29) まして, 龍を捕へたらましか (toraFe-tar-*amasika*) ば, また, こともなく我は害せられなまし (gaise-rare-n-*amasi*) [まして竜を捕まえていたら, やはり簡単に私は殺されていたろう] (竹取・13)

## 参考文献

- 大木一夫 2010 「古代日本語動詞の活用体系—古代日本語動詞形態論・試論」  
『東北大学文学研究科研究年報』59, pp. 1-36.
- 清瀬義三郎則府 1989 『日本語文法新論—派生文法序説』桜楓社.
- 金水敏 他 2011 『文法史』岩波書店.
- 高山善行, 青木博史 編 2011 『ガイドブック 日本語文法史』ひつじ書房  
(初版2刷).
- Frellesvig, Bjarke 2010 *A History of the Japanese Language*. New York: Cambridge University Press.